

經濟論叢

第九十六卷 第五號

経営意志決定問題の一考察 山 本 安 次 郎 1

1890年代論争にあらわれた

ロシア資本主義論の類型 (2) 田 中 真 晴 29

「経済表」と産業連関モデル 菱 山 泉 46

昭和四十年十一月

京都大學經濟學會

1890年代論争にあらわれたロシア

資本主義論の類型(2)

——トッガン-バラノフスキー——

田 中 真 晴

Ⅲ トッガン-バラノフスキー (1)

わたくしは前稿第1節においてナロードニキのロシア資本主義論の総括的代表作としてダニエリソン「改革後のわが国の社会経済概要」(1893)をとりあげ、(1) 1861年改革の性格規定、(2) 資本主義の概念 (3) 改革後のロシア経済と原蓄、(4) 工業資本主義と農民経済、(5) 市場論(市場理論とロシア市場論)、(6) ロシアとアメリカ、(7) 現在のロシアにおける経済変動の規制者、の7つの点について、ダニエリソンの所説を述べた。ついで第2節において、合法マルクス主義の代表的見解として、ストルーヴェ「ロシアの経済的發展の問題にたいする批判的覚え書」(1894)をとりあげ、それら7つの点について、ダニエリソンの所説と比較した¹⁾。その結果、多くの論点についての対照が示され、2つのロシア資本主義論の型がほぼあきらかになったと考えられる。

しかし、上記7つの点のすべてについて、両者の意見が噛みあっていたのではない。ダニエリソンの所説に対して、ストルーヴェが批判的に自説を展開していない論点として、(4)と(7)がある。すなわち、(4)については、ダニエリソンが繊維工業の資本主義的發展を確認しながらも、緩和されたかたちでの「賃労働者数一定論」を展開しているのに対して、ストルーヴェは、農民経済の零落の責任が工業資本主義にはないことを主張するだけで、工業の資本主義化自体を分析してはいない。(7)については、ダニエリソンが、現在のロシア

1) 田中真晴、1890年代論争にあらわれたロシア資本主義論争の類型 (1)、「経済論叢」95巻6号。

の経済の律動を規定しているのは穀物収獲の販売額（農家収入）であって、資本主義を特徴づける周期的景気循環ではない、と論定しているのに対して、ストルーヴェは格別の主張をしていない。しかも、その2つの論点、すなわち工業資本主義の分析とロシア経済の律動の規制者の問題はいずれも、ロシア資本主義論における重要論点である。

しかるに、トゥガンはストルーヴェに欠けているその2つの論点を、「過去および現在におけるロシアの工場、第1巻」《Русская фабрика в прошлом и настоящем, т. 1. 1898》²⁾（以下「ロシアの工場」とよぶ）において、くわしく展開している。わたくしが本節でトゥガンを取りあげるのは、主としては、ストルーヴェを補完するものとしてである。しかしながら、トゥガンはたんに上記の2つの論点についてストルーヴェを補完しているだけではない。トゥガンとストルーヴェは、合法マルクス主義なる思想集団のメンバーとして、一種の分業的協業をおこない、それによって相互に補完しあっているのであるが、しかし両者のあいだには、やはり見解の相違もあり、労作の性格のちがいもあって、そうした点をすべて無視することはできない。わたくしは、トゥガンの労作の性格と梗概についての最小限必要な紹介からはじめて、上記の2つの論点に対するトゥガンの所論に移ることにしよう。

ストルーヴェが「ロシアの……批判的覚え書」を書いた1894年に、トゥガンは「現代イギリスにおける産業恐慌」³⁾を書いた。ストルーヴェの労作が、史観からロシア経済の現状にいたるすべての問題にわたって、逐条的にナロード

2) わたくしは、B. Minzès 訳の著者校閲ドイツ語版、M. Tugan-Baranowsky, *Geschichte der russischen Fabrik*, 1900, vi, 626 S. を主として使用し、ロシア語第7版（1938年）を必要に応じて参照した。後者は第3版（1907年）の複製であるが、初版との差異は編者脚註に示されている。本稿のテーマにとって重要なのはもちろん初版である。トゥガンは第1巻たる本書において「発展の基本的輪廓をあきらかにした」とあと、第2巻においてロシアの工場および工場労働者の現状を、地帯別および部門別に研究する予定であった（*Ibid.*, S. 3）が、第2巻は完成されずにおわった。

3) Промышленные кризисы в современной Англии, их причины и влияние на народную жизнь, 1894, 原典未見。独訳、M. Tugan-Baranowsky, *Studien zur Geschichte der Handelskrisen in England*, 1901, と仏訳、M. Tugan-Baranowsky, *Les crises industrielles en Angleterre*, 1913, があり、鍵本訳「英国恐慌史論」は仏訳からの訳である。独訳と仏訳は相当の相違があり、章別構成も異っている。

ニキの見解を論難した、熱度のたかい論争の書であるのに対して、トッガンの労作は、ロシアならぬイギリスを対象とする、経済学の専門書である。しかし、だからといってロシア資本主義論争に無縁であるわけではない。トッガンはこの書において、知られているように、再生産表式と販路説を結びつけ、ナロードニキ的な過少消費説をしりぞけるだけではなく、資本主義的再生産過程の無矛盾的無限進行の可能性を積極的に主張しており、そのことは、ロシア資本主義論争の経済理論の局面に関係している⁴⁾。そこに展開されている市場理論は、資本主義の専一的支配のもとにおいて、資本主義のための市場が資本主義それ自体によって十全的にうみ出されてゆくことを主張するものであるから、資本主義の発展のためには非資本主義的な「第三者」の市場が必要であるとするストルーヴェよりも、ナロードニキ的市場理論の批判としていっそう徹底しており、また、急進的なブルジョワ合理主義たる合法マルクス主義の思想により適合的である。これはさきに列挙した7つの論点のうちの(5)に当るが、それにおいては、いま述べたように、合法マルクス主義の内部において見解の相違があり、トッガンはストルーヴェを、経済理論の面で越えている。

さて、トッガンは「現代イギリスにおける産業恐慌」を刊行したあと、新しいテーマの仕事に着手し、4年後にそれを「ロシアの工場」としてまとめた⁵⁾。「ロシアの工場」の性格を一言でいうならば、ロシア工業史というテーマ的限定のもとにおけるロシア資本主義論、あるいは、ロシア資本主義論争を基調とするロシア工業史である。前著「現代イギリスにおける産業恐慌」が、市場理論においてだけロシア資本主義論争に関係していたのに反して、「ロシアの工場」は、ロシア資本主義論争により直接的に、かつより全面的に結びついている。しかし、ヴォロンツォフ、ダニエリソン、ストルーヴェ、レーニンの労作

4) Vgl. M. Tugan-Baranowsky, *Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England*, Kap. I, VI, VII, VIII, 仏訳・邦訳では第2篇1～3章。山田盛太郎、「再生産過程表式分析序論」209-225頁。田中真晴、1890年代ロシア資本主義論争における思想と経済学、「経済論叢」95巻1号、Ⅱ節を参照。

5) 「現代イギリスにおける産業恐慌」はトッガンがモスクワ大学へ提出した修士論文、「ロシアの工場」は博士論文である。

が、現状分析そのものをテーマにしているのに対して、「ロシアの工場」は工業史というかたちでの、そしてそれを通しての、ロシア資本主義論争への発言である点に、特色をもっている。

トゥガンをはじめに、「人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定するということを、つねに記憶にとどめて」⁶⁾本書を書いた、と述べている。史的唯物論をめぐる論戦が広義のロシア資本主義論争の基礎的一環をかたちづかったことは、前稿において述べたが、トゥガンはかれ自身の解する史的唯物論をロシア工業史分析的方法的導糸としたのである。かれはまず、ピョートル改革の解釈において、ピョートル改革をロシアの生活に根をもたぬ「人工的な」ものとするコルサーク流の見解に対して、ピョートル改革以前に商業資本が相当に高度に発展・集中していたことが、改革における「工場」創立を可能ならしめた前提であったこと、工場創設における政府補助金の意義を過大評価してはならないし、外国人の「工場主」は実は比較的少数であり、大部分の「工場主」はロシア人の大商人であったこと、ツンフトの存在しないロシアで工業の発展を計ろうとすればピョートルの行き方しかありえなかったことを主張する。「ある種の資本家階級が存在していたからこそ、ピョートルは、ロシアに大工業を採り入れるというかれの目的を達することができた。ピョートルではなくて、モスクワ国家のそれに先立つ経済的発展が、資本家階級を出現させていたのである。」「ピョートルの工業政策が、かれの個人的見解に依存するものではなく、けっして偶然の産物ではなく、経済的必然性によって規定されたことをしめすのは困難でない」⁷⁾と。ナロ

6) M. Tugan-Baranowsky, *Geschichte der russischen Fabrik*, S. 2. トゥガンはこれよりさき、ナロードニキとの間の史観論争（ロシア資本主義論争の一環）に加わって、論文「歴史における経済的要因の意義」『Значение экономического фактора в истории』, Мир Божий, No. 12, 1895, を書いている。この論文をみることはできないけれども、トゥガンが史的唯物論を、経済的要因が歴史の決定力であるとする理論（経済決定論）と解していることは、ほぼストルーヴェと同じであり、そこに合法マルクス主義の史的唯物論解釈の方向が認められる。これに反してブレハーノフは、史的唯物論はいかなる意味においても要因理論ではなく、実在的に一なる歴史を諸要因の合成としてとらえることを拒否するものであることを力説した。この点は別稿において論及するはずである。

7) Tugan-Baranowsky, *Geschichte der russischen Fabrik*, SS. 19, 20.

ードニキがロシア資本主義を政府が西欧から持ちこんだ「人工的産物」と考えたことは、知られているとおりであり、ロシアの「西欧化」の起点たるピョートル改革を「人工的」とすることは、その史論的表現というべきものであるから、上のようなトゥガンのピョートル改革解釈が、史論の局面におけるロシア資本主義論争という意味をもつことは、あきらかであろう。ピョートル改革の解釈は典型的な一例であるけれども、トゥガンはそのほか、エカテリーナ2世治下(1762—96)における農民営業保護政策⁹⁾、19世紀における関税政策の変遷⁹⁾、工場立法の諸提案と挫折、またその一応の実現と変容¹⁰⁾、などの分析において、政策がそのときどきの経済的状況、階級のおよび国庫的利害関係によって決定された次第をあきらかにすることに、力をそそいでいる。

つぎに、本書の梗概について。本書は、「序説、18世紀における工場」「第1篇、改革前期の工場」「第2篇、改革後期の工場」から構成され、ピョートル改革の直前から1890年代現在までをカバーしている¹¹⁾。本書の中心は、「工場」の内的構造の史的变化を、社会経済的環境の影響に着目して追跡し、「工場」とクスターリ(農民的営業)との関係、すなわち大工業と小工業との

8) *Ibid.*, SS. 47-50.

9) *Ibid.*, S. 402 ff.

10) *Ibid.*, S. 438 ff. とくに S. 454 f.

11) 第1篇は、I. 改革期の直前のロシアにおける工業の発展、II. 賃労働工場、III. 世襲工場と農奴使用工場、IV. 農奴使用工場における労働者軽蔑、V. 改革前期の工場立法、VI. 労賃、VII. 工場とクスターリ、VIII. 工場に対する社会と文献の態度、の8章にわかれ、第2篇は、I. 最近時における工場工業の発展、II. 最近の工場立法、III. 労賃、IV. 工場とクスターリとの闘争、V. 1860年代および70年代における社会と文献の工場に対する態度、の5章から組み立てられている。

第2篇V章は、初版および独訳版ではミハイロフスキーで終わっていたのに対して、第3版ではV. 最近における工場に対する社会と文献の態度、と改められて、ヴォロンツォフとダニエリソンらをも対象にくわえている。それについていうと、ストルージュエ(およびレーニン)が、ヴォロンツォフとダニエリソンを同じものとして把握しようとしているのに対して、トゥガンはヴォロンツォフとダニエリソンとの相違に注目していることが特徴的である。トゥガンによれば、ヴォロンツォフはロシアにおいては忌むべき資本主義が自然死をとげるとみる「経済的楽観主義者」であり、経済の事実認識において空想的である反面、経済政策の提案においては現実主義的であるのに対して、ダニエリソンはロシア資本主義の発展の事実認識においてはより現実的、経済政策についてはより空想的である。そして、ダニエリソンは、チェルヌイジエフスキーからミハイロフスキーにいたる「急進的空想主義」の系譜をつくものであるが、ヴォロンツォフはそれとは異質的な「中農のイデオロギー」としてのナロードニキである、とトゥガンは述べている。
Русская фабрика в прошлом и настоящем, стр. 443-454.

関係が、社会経済的環境の如何によって、直接には「工場」の内的構造の在り方によって、どのように変化してきたかをあきらかにすることにある、といえよう。

トゥガンによれば、ピュートル時代の「工場」は、「自由な賃労働者階級がない」社会経済的環境のもとで創設されたがゆえに、農奴の強制労働に立脚し、また機械ではなく道具を使用していた。したがってそれは「資本主義的工場ではなかった」¹²⁾し、西欧における「厳密な意味でのマニュファクチュア」¹³⁾とも異っていた。ところで、ピュートル時代の工場主の多くは商人身分であったが、工場主に賦与された特権とくに農奴所有権は貴族の特権を侵害するとして、貴族の反撥をまねき、18世紀の経過中に、商人工場の特権剥奪と農奴労働を基盤とする貴族工場の進出がめだってくる。他方、農民営業（クスターリ）が抬頭してきて、商人層は農民営業の禁止を要求するが、農民営業によって農奴が豊かになることがすなわち農奴所有者たる貴族自身の富裕化を保証するために、貴族は農民営業の自由を擁護した。エカテリーナ2世時代における重農主義学説の流行と営業自由化政策はそうした利害状況の反映であった。18世紀においては、貴族工場は政府および上流階級向けの商品を、農民営業は庶民向けの商品を生産していて、競争関係にたつことはすくなかったから、「工場とクスターリとの間の敵対性はきわめて微弱であった」。それだけでなく農民は「工場」で修得した手工的技術にもとづいて、家内工業をはじめることが多く、「工場は工業技術の唯一の学校」「工場はクスターリのための実習所」¹⁴⁾であった。

19世紀には事情が変ってくる。イギリスでは産業革命が進行し、工業生産力

12) Tugan, *op. cit.*, S. 22.

13) 「西欧のマニュファクチュアは、手工業の残片のうえに生成した。それはそれ以前にあった手工業者層から、すぐれた熟練労働者をえた。ロシアのマニュファクチュアはまったく異った諸条件のもとで成立した。訓練をうけた熟練労働者がいなかただけでなく、未訓練労働者をつつけることも、きわめて困難であった。したがって……、唯一の出口は農奴の強制労働であった」(Ibid., SS. 26-27)。本文の叙述から知られるように、トゥガンは「工場」という語を、比較的多人数を集結させる作業場ぐらゐの意味で用い、「資本論」でいう「工場」をどくに「近代的工場」あるいは「資本主義工場」と呼んでいる。

14) Ibid., SS. 61, 62.

が飛躍的に増大したのに対して、ロシアでは強制労働の非能率性が目立ち、また強制労働は機械の導入を阻害した。ニコライ1世時代(1825—55)には、工場主自身が強制労働よりも自由労働を望む傾向が出てきて、自由労働の比重が高まった。19世紀には、貴族工場および商人工場のほかに、農民が所有者である工場が創設された。「この新しい工場類型の出現は、……ロシアの産業がすでに商業資本主義段階を脱して、産業資本主義段階へ入ったことを証明した。農奴的工場は、産業革命の結果、その生命がつきた。それは、企業家と労働者とのあいだの自由な契約に立脚する、新しい資本主義的工場によって置きかえられた」「19世紀の前半は産業資本主義の増大と、以前の農奴的工場の資本主義的工場への転化によって特徴づけられる」¹⁵⁾ トッガンはこのように述べている。ここですこし注釈をさしはさんでおかねばならない。トッガンが資本主義の成立を、商業資本の産業資本への転化(商業資本主義の産業資本主義への移行)、というシェーマでとらえているのは、社会的分業(交換経済)の展開を基礎視点として資本主義成立をとらえるストルーヴェと、異っている。トッガンには、ストルーヴェのような広義の資本主義と狭義の資本主義という考え方はない。かれは、社会的分業(交換経済)の発展を、かれのいう商業資本主義、産業資本主義のいずれもの前提と認めているにすぎない。つぎに、トッガンの「産業資本主義」の概念についていうと、かれはこの概念を一応、生産点における資本・賃労働関係(契約による賃労働者の雇用)を基準としてとらえている。かれはそれによって、61年改革以前にロシアは「産業資本主義段階に入った」としているのであるが、それは、かりに工業の先進的部分の内的構造についての命題ではありうるとしても、経済的社会構成についての命題ではありえないはずである。トッガンは経済的社会構成の概念を欠いているために、すくなくともそれを明確にしていなかったために、工業の資本主義的形態の出現と、社会構成の資本主義化との間の区別が十分ではなく、前者がそのまま後者でもあるような叙述をする結果になっている。ストルーヴェがロシア資本主義の発展のひく

15) *Ibid.*, SS. 117, 118.

さを強調するのに対して、トゥガンはロシア資本主義をヨリ成熟した段階にあるものと見ていることは、後段でも知られるところであり、それはストルューヴェとトゥガンとの相違点のひとつであるが、トゥガンがロシアの産業資本主義段階への移行をかくも早期にみているのは、いま述べたような理由によると考えられる¹⁶⁾。注釈を切りあげて、トゥガンの議論を再びたどろう。

トゥガンによれば、機械制工場への移行は自由労働の行使を基盤とし、またそれを必然化するが、機械制工場こそが、「工場」と「クスターリ工業」の関係に決定的な変化を生じさせる。61年改革前における力織機をもつ木綿工場の出現はその意味で劃期的である。しかし、機械制工場の出現以前においては、事態は異っていた。たとえばヴォロンツォフは「クスターリ工業は農民の家内労働から発生した」¹⁷⁾とし、ビュッヒャー、ゾンバルトらもその説に同調しているが、この通説は事実の一面を伝えるにすぎない。実は、クスターリは農民の家内労働から発生したものほかに、工場が分解して、工場主が問屋あるいは買占人に転化し、工場労働者が「自立的」クスターリになったというケースが多数検出できる。このようなことがおこったのは、機械を知らぬ「工場」が、生産力においてクスターリ工業に格差をつけることができず、経費負担のみ重

16) トゥガンは「商業資本主義から産業資本への移行」ということを、ピョートル改革期の工場創設についても云い(Vgl. *ibid.*, SS. 10, 15), また別の機会には、1890年代ロシアについてもいっている。「ロシアは現物経済の国ではなくて、商業資本主義の国である。……われわれは経済的進歩、ヨリ高次の経済形態へのロシアの移行、商業資本主義の産業資本主義への転化を支持する」(“К вопросу о влиянии низких хлебных цен”, *Новое Слово*, No. 12, 1897; J. Kindersley, *The First Russian Revisionists*, 1962, p. 84 から引用) と。しかし、ピョートル改革期については、その「産業資本主義」が本来の産業資本主義でないことが行論においてあきらかにされている。また1890年代現在については、トゥガンが商業資本の比重がいまなお大きいことを問題としたことをしめしているけれども、本文後段の叙述によって知られるように、改革後のロシアは資本主義的景気循環をもつ資本主義国であるというのが、トゥガンの基本的見解であったといわねばならない。トゥガンがロシアにおける産業資本成立期を61年改革よりも前に見たことは、19世紀前における農民工場の生成について「この新しい型の工場はロシア工業がすでに商業資本主義の段階を越えて、すでに産業資本主義の段階に入ったことを証明している」とし、「19世紀の前半は産業資本主義の増大と従前の農奴工場の資本主義的工場への転化によって特徴づけられる」(Tugan, *op. cit.*, S. 117, 119) と述べていることによって知られる。「ロシアの工場」は注11) で記したように、61年改革を境にして前後二篇にわけられているが、内容についていうと、61年改革のロシア資本主義に対する意義は比較的軽くみて、むしろ61年改革前に自然生的に進行していた経済過程をもっぱら重んじている。注 6), 27) を参照。

17) M. Tugan-Baranowsky, *Geschichte der russischen Fabrik*, S. 254. ヴォロンツォフ説の実証的批判は *Ibid.*, SS. 255-266.

いたためであった。工場とクスターリとが競争するばあいには、たいてい工場がクスターリに圧迫されたというこのような現象は、現代の工場とクスターリとの関係からはほとんど想像しにくいことであるが、19世紀はじめの歴史的事実だったのである。

以上はトゥガンが序説および第1篇で述べていることの骨子中の骨子である。

IV トゥガン-バラノフスキー (2)

トゥガンは、第2篇において、機械制工場の登場後におけるロシア工業史を展開している。われわれは、さきにかかげておいた2つの問題、すなわち、工業の資本主義的發展それ自体の分析 (4) と、ロシア経済の律動を規制するものはなにか (7)、についてのトゥガンの回答をそのなかに見出すことができる。そしてその部分は同時に、第2篇自体の中心部でもある。トゥガン自身の叙述順序にしたがって、第1、2節の指標の順序とは逆に、(7)をさきに述べよう。

(4) トゥガンは第2篇に入って間もなくのところに、「農奴解放以後におけるロシア産業の発展行程についてのはっきりした観念を与えることができる」と称する表と付図¹⁸⁾をかかげている。表は、

- ① ロシア帝国(フィンランドをのぞく)において消費された外国産および中央アジアの棉花量
- ② ロシア帝国(フィンランドをのぞく)において消費された外国産の綿糸量
- ③ ロシア帝国(フィンランドをふくむ)において生産された銑鉄量
- ④ ヨーロッパ・ロシア 50 県の間接国内消費税非賦課工場の労働者数
- ⑤ ヨーロッパ・ロシア 50 県の穀物収穫総量
- ⑥ ニジェ・ノヴゴロドの年市に出された商品価額

の6項目についての1860—96年の期間の年毎の時系列である。付図はこの表を折線グラフにあらわしたものであるが、表と付図とはすこし違っていて、付図では②が省かれてそのかわりに、

18) *Ibid.*, S. 378. 付図は独訳版では巻末、ロシア語第7版では стр. 255.

⑦ イギリス(連合王国)の輸出価額

が加えられている。トッガンによれば、表および付図によって、つぎの諸点があきらかである。

まず、①は変動しながらも上昇しているのに対して、②は1879年を頂点として減少している。このことはロシア綿工業の発展をしめしている。つぎに⑥は1881年を頂点としてその後は下降線をたどっている。伝統的な年市の衰退は、運輸・流通の変革をとまなう「産業資本主義の発展」¹⁹⁾の必然的帰結である。

④すなわち工場労働者数は、上昇線をえがくが、直線的ではなく3つの波が認められる。第1の波は1773年が最初の頂点、それから減少して77年に73年水準に回復、82年が第2の頂点、ついで減少、87年から回復、91年の飢饉の年にすこし減少するだけで93年まで急速な上昇をつづけている(労働者数のデータは同年まで)。

①の棉花輸入量は綿花加工量と同じではないし、関税その他の事情による変化も受けるけれども、そのような事情を考慮して調整すると、棉花輸入量が綿工業の生産水準を近似的にあらわす。そうすると、①と④は1886年まで、ほぼ並行した変動をしめすことが注目される。それ以後①は年毎の大きい変動をとまないうち、急上昇している。④はもはや前年度にくらべて減少することなく上昇している。

③の銑鉄生産量は、波がすくなく、農奴解放後一時下降、86年まで緩慢に上昇し、それ以後96年現在まできわめて急激な上昇をしめす。いうまでもなく南部鉱業の発展がその実体である。

トッガンは、「これらの曲線の動きは、改革後の時期におけるわが国の工業の歴史を、明瞭に表現している。あきらかに、わが国の工業の発展には変動が

19) *Ibid.*, S. 383. 1880—81年ごろに②綿糸輸入量と⑥年市搬入価額の両者が減少に転じたことは、ロシアにおける産業資本の展開の週期を考えるうえで重要であると考えられるが、トッガンはそれについて十分な考察はおこなっていない。1880年代初頭に農奴制残基の一定の解消と産業資本の展開の週期を認めることについては、和田春樹、近代ロシア社会の構造、歴研別冊「世界史と近代日本」1961年；中山弘正、ロシア資本主義成立期の諸問題—工業をめぐって—、「経済志林」31巻4号、を参照。

みられる」しかも「その変動は、他の資本主義諸国の工業と同じように、周期的反復という性格を帯びている」²⁰⁾ という。

つぎに、⑦のイギリスの輸出価額の変動をみると、ロシアの工場労働者数の変動との間に、上昇と下降の見事な時間的一致が認められる。「イギリスの輸出とロシアの工場労働者数の変動の平行関係は驚くべきものである。われわれは、このばあい、同じ国に関する曲線を取りあつかっているのではないかと思うぐらいである。イギリスの輸出が増えると、ロシアの工場労働者数が増えるし、ロシアの工場労働者数が減るとイギリスの輸出が減る」²¹⁾ ただひとつのちがいは、最近においてはイギリスの輸出は増加していないのに、ロシアの労働者は増大しつつあることであり、これはイギリス資本主義の発展の停滞、ロシア資本主義の急速な発展のためである。

それに対して、⑤の穀物収穫量の変動はどうか。穀物収穫量は、工場労働者数、綿花輸入量、年市販売価額の変動と一致しない。70年代中葉の沈滞期にはむしろ豊作が対応し、70年代末—80年代はじめの高揚期にはおおむね平年作以下であり、80年代の沈滞期のうち凶作は85年だけ、逆に90—91年の大凶作（飢饉の年）は、工場労働者数、綿業の上昇をおしとどめなかった。また穀物収穫と銑鉄生産のあいだにはまったく関連がみられない。しかるに、「ロシアの工業の状態を規定する唯一の要因、あるいはすくなくとももっとも重要な要因は、穀物の収穫であると、一般に思われている。この意見はニコライ・オン（ダニエリソン）氏においてもっとも明白な代表者を見出した。この経済学者にとっては……豊作がロシア工業の‘繁栄’のほとんど唯一の原因のように考えられている。この命題がオン氏の全理論にとってどれほど重要かを理解することは容易である。もし、わが国の工業の変動がもっぱら収穫の変動によって説明されうとするならば、そのことは、農業の‘人民的生産’が、現在にいたるまで、ロシア資本主義という不安定な建物の基礎をなしていることを意

20) *Ibid.*, S. 386.

21) *Ibid.*, SS. 386-387.

味する」²²⁾。事実ダニエリソンの主張を裏切っている。かれの統計的基礎づけるものは、1886—88のわずか3ヵ年について、農業所得と工業所得の間の変動の平行関係を掲げているにすぎず、それは89年にはもはや妥当しない。ヨリ長期については、さきにみたごとくである。「そうはいっても、収穫がわが国の工業の状態になんの役割も演じていないということにはならない」²⁴⁾ 綿工業の変動を規定する唯一の原因が収穫であるとはいえないが、収穫が農民の購買力を媒介にして、綿工業の当年ではなく翌年の水準を規定する重要な要因であることは認められる。しかし、それだけであって、収穫は鉄など一般に金属加工工業に対してはほとんど影響をもっていない。

トッガンはこうに論じて、ダニエリソン説をしりぞけ、ついで1857年、1873年の世界恐慌がロシアをもそのなかに巻きこんだことを具体的に述べている²⁴⁾。トッガンはそれによって、さきのイギリスの輸出価額曲線とロシアの工場労働者数曲線との平行関係の確認とあいまって、ロシア工業の律動が資本主義的景気循環、それもイギリスを中心とする世界資本主義の景気循環によって規定されていること、したがって、ロシア経済の再生産構造がまったく資本主義的な性格になってしまっていることを、論証しえたと考えた²⁵⁾。トッガン

22) *Ibid.*, S. 387.

23) *Ibid.*, S. 390.

24) *Ibid.*, SS. 391-401 を参照。

25) トッガンの議論が史実をどの程度まで正当にとらえているかという点の検討は、本稿のテーマではない。ただ、トッガンの議論の展開方法について問題と思われる点を指摘しておく。第1に、ロシア経済の変動がイギリス資本主義（あるいは世界資本主義）の景気循環によって規定されていることを証明するためには、イギリスの輸出価額（その他の指標でもよい）とロシアの労働者数の変動の波がパラレルであるという事実だけでなく、前者によって後者がどのように規定されているかの因果的説明がなければならない。トッガンの展開は、相関関係がただちに因果関係を意味するかのごとくになっていて、因果関係そのものの説明に乏しい。これがもっとも根本的な問題点であるが、そのほか第2に、同一グラフに数々の時系列を描くばいには百分比表示でなく異質的諸単位の実数値表示をしていること、循環変動を明確にするための趨勢除去や相関度検出の操作をしていないなど、相関の認定についても不備がある。

なお、メンデルソンによれば、ロシアは1837年、1847年恐慌においては外国貿易を通して部分的にはつよい影響を受けたが、それは国民経済全体にわたるものではなかったし、ロシアの再生産過程の循環性はもちろんまだ存在しなかった。1857年、1866年恐慌においては、ロシア経済のなかに「恐慌のための一定の内的諸前提」が成熟しつつあったが、「ロシアにおける恐慌諸現象はまだ基本的には、イギリスやその他の発展した資本主義国におけるよその過剰生産のはねかえり」であり、1873年にはじめて、「工場制生産が周期的過剰生産のさけられない水準に達した」結果としての、ロシア自体のなかに根をもつ「全般的過剰生産恐慌」があらわれ、1882年、1890

は、ロシア経済の律動に関するこの部分において、みられるとおり、せまい意味でのロシア工業史をはみ出す議論を展開しているのだが、そこに前著「現代イギリスにおける産業恐慌」とのつながりがみられる。トゥガン自身は言明していないけれども、イギリスの輸出価額の数字をふくめて、19世紀後半のイギリスを中心とする恐慌史のとらえ方は、前著に拠っているし、諸指標の経過グラフによる循環表示の手法も、前著を踏襲している²⁶⁾。テーマとしては一見かけはなれている「現代イギリスにおける産業恐慌」が、市場理論（実現理論）におけるナロードニキの市場理論批判の点でロシア資本主義論に関連するだけでなく、ロシア経済の再生産構造の性格規定において、重要な関連性をもつことは注目されてよい。なおいまひとつ、合法マルクス主義者の内部においても、ストルーヴェがロシアの資本主義化をもはや動かしがたい事実と認めるとともに、その発展の程度の低さを強調し、ロシア資本主義のアメリカ的段階への将来の移行を展望しているのにくらべて、トゥガンはロシア資本主義がすでに成熟していることを強調していることが、上述の行論から読みとれるであろう²⁷⁾。

(ロ) つぎに、ロシアにおける工業の資本主義的発展の具体的な事実認識について。前述の諸指標のなかで中心的な位置をしめているのは工場労働者数であるが、その算定はロシア資本主義論争のひとつの焦点であり、トゥガンも蓋然性のたかい工場労働者数の時系列を作成するのに苦心した。

年恐慌を経て、1900年恐慌においては、恐慌の重心が重工業に移行した。メンデリソン、飯田實一他訳「恐慌の理論と歴史」第2巻、257、361、395、467、611 ページ、第3巻、135、322 ページ、第4巻、245ページ。メンデリソンの各恐慌の解釈の当否は別として——私はたとえばロシア経済自体のなかに根をもつ恐慌のはじまりは1873年ではなくもっと後だと考えたい——、よその影響と内的条件の成熟とを区別している点は重要である。トゥガンのばあい、世界資本主義の循環にまきこまれることを直ちにロシア資本主義の確立と同一視している把握法は肯定しがたい。

26) Vgl. *Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England*, SS. 149–152, 135–173. (邦訳、141–145, 172ページ) を参照。

27) ストルーヴェがロシア資本主義の未成熟性を、トゥガンがその成熟性を強調したのは、ストルーヴェが農業を、トゥガンが工業をテーマにしたこと、ストルーヴェ「……批判的寛え書」(1894)からトゥガン「ロシアの工場」(1898)まではわずか4年だが、この4年間はロシア工業の急テンポでの発展の時期であったことにもよると考えられる。注16) を参照。

工場労働者数の算定は、いうまでもなく統計利用の方法に関する問題である。そのくわしい内容にたちいることはできないけれども、トッガンはダニエリソンの統計利用法に対して、ふるい時点については小仕事場の労働者をふくむ統計を、あたらしい時点については小仕事場の労働者をいれない統計を、そのままつなぎあわせていると、批判している。かれ自身は、基準の相互に異なる数種の統計を加工して、ほぼ同一基準によると考えられる時系列をつくった²⁸⁾。それによると、1865年の38万1千人に対して、1890年は72万人であって、25年間に89%の増加がしめされ、ヴォロンツォフ、カルリツェフのような、工場労働者数は減少しつつあるという見解はもちろんのこと、ダニエリソン、カブルコフのように、工場労働者の増加率は微小であって、人口増加率よりもひくいという見解は根拠のないものであることがあきらかである、とトッガンは主張している。ダニエリソンによれば工場労働者は25年間に5.5%しか増えなかったのだが、トッガンによれば、1887—93年の期間について、人口の年間増加率が1.35%、工場労働者の年間増加率は約5.0%である²⁹⁾。

トッガンはつぎに、工場労働者のたかい増加率は工場制工業の急速な発展をしめしているが、工場制工業のなかでも部門によって増加率が不均等であること、また綿工業においては労働者100人以下の工場は工場数、労働者数ともに減少し、労働者5,000人以上の最大級の工場では「1879—1894年の15年間に労働者が6倍以上に増大した」³⁰⁾こと、綿工業以外の諸部門においても、食品加工を例外として、「1工場当りの労働者数は増加している」ことを、数字をあげてしめしている。「資本主義的な工場生産は、たえず新しい産業部門をつか

28) *Geschichte der russischen Fabrik*, SS. 378, 379—381 Anm., 414—429. 工場労働者数の算定のポイントは「工場」の規定にある。トッガンは16人以上使用または年生産価額1,000ポンド以上のものを「工場」とする1885年以降の統計を基準にし、他の諸統計を加工してそれにあわせているのだが、厳密な意味での「工場」の検出の点で、トッガンはレーニン（「わが国の工場統計の問題によせて」1898, 「全集」第4巻）に及ばない。トッガン自身も、工場労働者の実数認定の困難をみずから認めており、みずからの作成した工場労働者数の時系列について、「それは各年の労働者の実数の規定に対してもつ意義は小さい。……しかし、労働者数における年間の相対的変化が問題であるかぎり、使用にたえる」（*Ibid.*, S. 380, Anm.）と注記している。

29) *Ibid.*, SS. 414, 417—418.

30) *Ibid.*, S. 431.

み、農村からつぎつぎに出てくる出稼ぎ労働者を工場の屋根の下へ集めることによって、広がっているだけではなく、それと同時に、工場自体のあいだにおいて、小企業と大企業との間のしつような闘争がおこなわれている。大工場はクスターリだけでなく、小工場をも駆逐している。企業形態はますます大きくなってゆく」³¹⁾ トッガンはこのように生産の集積をとらえる。ナロードニキは工業の資本主義化を認めるばあいでも、そのロシア的特殊性を力説する³²⁾ のに対して、トッガンは、資本主義的蓄積法則の、西欧と異なるところのない、正常的な貫徹をロシアに認めるのである。

さて、工場労働者の増大は疑いえないにしても、かれらは本来の意味での近代のプロレタリアートであるのだろうか。ロシアの工場労働者は主として農閑期に出稼ぎする農民であり、「西欧の工場労働者とは本質を異にしている」というのは、ひろくおこなわれているナロードニキの見解である。トッガンはそれに対して、デメンティエフの労作に拠って³³⁾、モスクワ地区の機械制工場においては、季節的出稼ぎ労働者は8%にすぎず、圧倒的部分は年間常雇労働者であり、「手工的労働から機械制への移行が、労働者を土地から切りはなしつつある」³⁴⁾ こと、かれらは分与地に対する租税負担の点で故郷に結びつけられているにすぎない名目的な農民であること、3世代にわたる工業プロレタリアートもかなりいることを述べ、「われわれは真の労働者階級、いわば恒常的であって、けっして暫定的ではない工場労働者階級をもっている」³⁵⁾ と結論している。そしてかれは、ロシアにおけるそのような「真の労働者階級」の総数をつかむことはできないし、またその総数は必ずしも多くないにしても、その増加傾向こそが決定的に重要なのだ、とつけくわえている。

31) *Ibid.*, S. 433.

32) 松岡保, ナロードニキのロシア資本主義論, 桑原武夫編「ブルジョワ革命の比較研究」, 563ページ以下; 吉原泰助, 蓄積論における古典と近代 (1), 「商業論集」33巻4号, 156-157ページ; 田中真晴, 1890年代論争にあらわれたロシア資本主義論の類型 (1), 「経済論叢」95巻1号, 21-22ページ, を参照。

33) Е. Деметьев, Фабрика, что она дает населению и что она у него берет, 1897.

34) Tugan-Baranowsky, *op. cit.*, S. 521.

35) *Ibid.*, S. 524.

ロシア資本主義論争の、工業に関するいまひとつの焦点は、クスターリ工業の問題である。前節で指摘したように、トゥガンは「工場」とクスターリの関係の史的分析にはとくに力をいれており、機械導入以前の工場は、むしろクスターリから圧迫されていたことを強調しているが、それはひとつには、機械導入後における工場とクスターリの関係の完全な逆転を述べるための対照的な前置きであった。かれは綿工業を先頭とする繊維工業、金属工業、製革業、製陶業、木材加工業などを逐一検討し、機械制工場によるクスターリの駆逐がもっとも典型的にみられるのは綿織物であり、木材加工などにおいてはまだ機械の本格的な導入ははじまっていないのであるが、機械制工場のクスターリに対する勝利は、どこにおいても明白であるとしている。かれによれば、それについて注意すべきはつぎの点である。第1に、「工場制生産の増大とともに、残存クスターリ企業においては生産の集中化ではなくて、反対に生産の分散化がおこなわれる」³⁶⁾ ことである。クスターリは生産費を極度に切りつめることを強いられ、クスターリ作業場から農民小屋へと後退してゆくのであって、「クスターリ生産の純粹形態における再建」が進行しているかにみえるのは、実は「クスターリという企業形態の断末魔のしるし」³⁷⁾にはかならない。第2に、機械制工場によるクスターリ工業駆逐には2つの道があって、ひとつは、「工場が地方のクスターリ工業とは無関係に成立し」て、クスターリ工業をほろぼすばかり、いまひとつは、「クスターリ作業場が工場に転化する」ばかりである。いずれのばかりがおこるかは、「工場企業の技術の状態」によってきまるのであって、工場企業の技術がクスターリ工業の技術とかけはなれていないときにきざって、クスターリ工業の工場への転化が可能である、とトゥガンは述べている。

36) *Ibid.*, S. 533.

37) *Ibid.*, S. 566. 機械制工場がクスターリを完全に絶滅するまでの過程、あるいは完全には絶滅しないような部門においては、機械制工場の制覇がクスターリの零細化をひきおこし、小クスターリの数がふえるが、それによってあたかも独立クスターリの生命力が証明されたかのごとくに思ふナロードニキの幻想（ただしダニエリソンはこの幻想を共有していない）を生ぜしめるのだという指摘は、トゥガンの得意の論点のひとつである。Vgl. *ibid.*, S. 577 f.

トッガンのクスターリ工業論を読んで気のつくひとつの点は、「クスターリ工業」のなかに小商品生産からマニュファクチュアにいたる諸段階の資本主義的生産関係をさぐり出すことに力点をおくレーニンのクスターリ工業論にくらべて、クスターリ工業そのものの生産関係分析がほとんどなく、機械の有無による工場とクスターリ生産とのあいだの生産力格差にもっぱら注意がむけられていることである。このことは、トッガンの基礎視点にふかく関連している。

トッガンの基礎視点はなによりもまず、機械制工業の生産力の進歩的意義を、ロシア工業史についてあきらかにすることにあった。かれはストルーヴェとともに、資本主義の過渡的・歴史的性質を認め、未来社会を社会主義として考えているが、じっさいにかれが意欲し、したがってまたかれの分析のじっさいの基準となっているのは、やはりストルーヴェと同じく、資本主義であり、資本主義内部における改良、野蛮な資本主義から文明的な資本主義への移行であった。トッガンは、機械制工業が賃金をたかめること、労働時間の短縮が単位労働時間あたり労働生産性をたかめることを強調し³⁸⁾、またロシアにおける工場法の歴史に多くの紙幅をさいて、野蛮なモスクワ資本と進歩的なペテルブルク資本とを対照させているが³⁹⁾、それらは、ストルーヴェの「市場生産に適合した資本主義的農民層の創設」の提案とともに、合法マルクス主義の経済政策論の方向をしめしている。

38) *Ibid.*, S. 490 f. トッガンは紡績業においては労働日の短縮が生産物の品質向上をもたらし、織物業においては、時間当たり生産量のいちじるしい増大をもたらしたという報告をかかげている。

39) トッガンは、ロシアの工場法の歴史を、工場主の利害、労働者の反抗、政府の処置、を3つの契機としてとらえている。政府の内部においては、もっとも反動的な内務省が治安の立場から工場法を制定しようとし、ブルジョワ的な大蔵省がそれをおさえようとしたこと、また、景気循環の局面によって工場主の工場法に対する態度が変化することなど、細部にわたる興味おかい分析がみられるが、とくに特徴的なのは、ペテルブルク工場主の利害とモスクワ工場主の利害の対立の描写である。トッガンによれば、合理化がすすみ、かつ相対的に高賃金のペテルブルク地区の工場主は、モスクワとの競争において労働時間制限を有利として、たえず工場法の制定を望んだのに対して、工場主の装備において劣り、低賃金長時間労働の本場たるモスクワの工場主は、結束して工場法に反対してきた。トッガンは、ロシア資本主義がモスクワ支配の段階からペテルブルクの段階に進むことを展望し、意欲している。 *Ibid.*, S. 438 ff. とくに S. 461 ff. なお、ペテル(およびロシア領ポーランド)対モスクワの対立への注目はストルーヴェおよびシュルツェ・ゲーファニッツにもみられる。 Vgl. P. Struve, Arbeiterschutzgesetzgebung und Gewerbeinspektion", *Centralblatt für Sozialpolitik*, IV. Jg., 1895, SS. 45-46; Schulze-Gävernitz, *Volkswirtschaftliche Studien aus Russland*, 1899, SS. 125, 146 f., 163-170, 264.